

トウノウネコノメ	<i>Chrysosplenium pseudopilosum</i> Wakab. et Hir.Takah. var. <i>pseudopilosum</i>	絶滅危惧種 I 類
		ユキノシタ科
選定理由	生育面積が狭く、個体群も希少で個体数の減少が著しい。	写真(岐阜県博物館)
形態の特徴	小型の軟弱な多年草、花茎は葉状苞をつけるややまばらな集散花序になり、高さ3-8cmで軟毛がまばらにある。基部に3-9個の円鋸歯がある柄とともに3cmほどの単葉を対生する。がく片は円頭で4個、黄色~黄緑色で直立する。葯は黄色、8本のおしべが花柱とともに4枚のがく片から突出する。	
生態的特徴	山地の半日陰~陰湿地にみられる。花は後に鐘状のまま緑色になり、がくは二つのくちばし状の突起がある蒴果を抱く。花期は4月、後に葉腋から延びた枝は地表に広がり、先に新株をつくる。	
分布状況	日本固有種。種としては、岐阜県南東部および京都市北部、南西部に隔離分布する。京都府に分布する変種はヤマシロネコノメとして区別されている。	
減少要因	植林地の管理放棄など、林下の日照不足、森林開発による土砂の流失、大規模な砂防工事や林道工事などによる生育地の消失。	
保全対策	生育地の保全。開発・工事にあたっては、植生を最大限保存できる工法の採用。設計段階以前に生育地の保全管理方法の検討が必要である。	
特記事項	1999年に記載された新種。	
参考文献	Michio Wakabayashi & Hiroshi Takahashi (1999). A New Species of <i>Chrysosplenium</i> (Saxifragaceae) from Central Honshu, Japan. <i>Acta Phytotax. Geobot.</i> 50(1):1-11	

文責: 後藤常明